

**FY2019 Annual Report for International Joint Research with Research Fund**  
**International Joint Digital Archiving Center for Japanese Art and Culture (ARC-iJAC),**  
**Art Research Center, Ritsumeikan University**

Date (year/mm/dd): 2020/5/27

1. Title of the Research Project	
Digitalizing & Archiving of the Journal “KYOTO TOMORROW” Published by Citizens	
2. Research Leader	
Name	Organization and title
Jun OGURO	Professor, Doshisha University
3. Co-researcher (Total: 5 persons)	
Name	Organization and title
Yasuhiro ORITA	Lawyer, Keyaki Law Office
Mikako OI	Social Worker
Maya HIGUCHI	Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University (JSPS Research Fellowship for Young Scientists PD)

4. Overview of the Research Project (About 150 words) Note: If you have changed your project since the time of application submission, please write clearly where you made changes.
<p>本研究は 1988 年から 2003 年にかけて、京都に拠点を置く学者、弁護士、科学者、市民運動家らが、社会の諸問題を、市民の視線で捉え直し、議論を深め、発信し続けた、手作りの雑誌『京都 TOMORROW』約 50 号を対象にする。「京都の市民による、市民のための雑誌」として、特定のイデオロギーに偏らず、高齢者ら社会的弱者を包摂するベクトルで編集された。この編集方針に共鳴した、著名な文化人が数多く寄稿した。「多事争論」を信条とした、先駆的な雑誌だったと言える。</p> <p>紙媒体の雑誌として現在すでに稀少性があり、著名な文化人の言説を記録した、貴重な日本・京都の文化資源として、デジタルアーカイブ化が急がれる。内容を調査し、データベース化すれば、社会運動研究やジャーナリズム研究だけでなく、社会学、政治学、行政学、社会福祉学、メディア研究論といった、学際的なアプローチが可能となる。</p>
5. Overview of the Research Results Note: We may use this section for the Center’s PR.

2018年度、雑誌『京都 TOMORROW』は ARC 近代書籍 ポータルデータベースに全文を公開した。2019年度は、そのデジタルアーカイブを用いて、『京都 TOMORROW』の研究を進めた。本研究の主眼は、雑誌のデジタルアーカイブ化によって、資料のアクセス環境を簡便にし、それによってジャーナリズム研究以外の視点から雑誌記事を用いた研究が増えることを目標にしている。本研究はその実践として、市民活動の実態調査という視点で研究を行い、「市民メディアとしての『京都 TOMORROW』 ("KYOTO TOMORROW" as Citizen Journalism) 『アート・リサーチ』20号としてまとめた。その研究内容を以下に示す。

本論は、1988年10月から2003年秋に京都で発行された雑誌『京都 TOMORROW』を、京都の社会状況を踏まえながら、特集記事を質的に分析したものである。その結果、京都市民は地域のミニコミ誌として自主的に『京都 TOMORROW』を発行していたことが明らかになった。その内容は景観問題など多様なテーマに至っており、紙面上でも議論がなされていた。すなわち京都市民は、『京都 TOMORROW』によって市民団体が連携し、運動を続けるために基盤を築いたといえる。

## 6. Research Activities

### (1) Books

### (2) Articles

- ・「市民メディアとしての『京都 TOMORROW』 ("KYOTO TOMORROW" as Citizen Journalism) 共著、2020年3月、立命館大学アート・リサーチセンター、『アート・リサーチ』20号、小黒純、樋口摩彌、pp.37-52、査読有

### (3) Presentations

### (4) Symposiums and/or research meeting you organized

### (5) Other research activities (Lectures to the general public, and appearances in/contributions to mass media)

### (6) Academic awards

### (7) Grants-in-Aid for Scientific Research -KAKENHI

### (8) Competitive grants other than KAKENHI

### (9) Other achievements